

編集後記

本誌は第一〇号刊行の節目に達した。「三号雑誌で終わってもいい」というつもりで創刊号が出たのだった。それがもう一〇号に辿り着いたのである。この間、哲学関係の雑誌が廃刊か、廃刊同然の状態に追い込まれていった。発行の基盤を考えれば、本誌にも脆弱な面がある。しかし三〇年にわたる会員たちの眞摯な活動と、新世社をはじめとする各方面からの支援に恵まれて、この記念すべき刊行の日を迎えることができた。

『パトリスティカ』は日本の社会にいかなる貢献をしてきたか、と問うことを今は控えたい。それは今後の努力次第であろう。むしろこの節目の時に思い出すのは、会設立の趣意書である。そこにはこう記されている——「現代における形而上学、一般に広く、根源的な哲学思索が汲むべき不可欠な源泉の一つに教父の哲学・神学の思索があることをわれわれは認める。」この文章は教父哲学とその隣接分野の研究を、強く呼び掛けている。『パトリスティカ』はその呼び掛けに応じて、様々な角度から、教父哲学の内実之光をあてて来たのだ、と言えよう。もはや教父哲学は素姓の知れない研究対象などではない。本誌の既刊号を前に置いて、教父哲学の存在を指差しうるからである。もちろんそれは、他の出版活動とも手を携えてのことである。

節目は過渡的滞留の時でもある。カゲロウは水生昆虫の段階を脱して羽化し、薄い緑の羽根を伸ばす時、そこから一挙に飛翔するのではない。次なる飛躍の体力を貯えるかのように、水際の岩にじっとしがみついている。その姿は弱々しく、外敵の攻撃にさらされやすい。何かの定めのように、節目において脆弱な面を見せること、それは『パト

リステイカ』についても認められる。

一つの面を紹介しておきたい。発行部数の問題である。現状では、一回の刊行につき二〇〇部印刷している。そのうち約一〇〇部は個人会員宛であり、機関講読会員（大学図書館など）は一四部しか出ていない。だからバック・ナンバーの在庫は増える一方である。それをどこでどう保管するかは、厄介な案件となってくる。『パトリステイカ』の店頭販売は当面困難だとすれば、解決策は二つしか無いだろう。発行部数を一〇〇部程度に減らすか、機関講読会員の数を五〇件以上に引き上げるかである。いずれを採るにせよ、会員の総意を土台に据えて打開するしかないと思う。



今年度から中西恭子さんが編集幹事をつとめて下さっている。御存知の方も多と思うが、皇帝ユリアノスの宗教政策やアンティオキアの神学を中心に研究をなさっており、巾広い活動分野をお持ちです。若さ溢れる仕事ぶりで、早速、本号の編集にあたっています。一筆御紹介まで。

今回収録した五本の論文は、いずれも教父研究会例会での発表に基づいております。ただしいつもと違って討論部分がありません。様々な理由から、録音機材の準備が調わなかったことが、主たる事情でした。

(有)